

重要無形文化財常磐津節を現代から次世代へ繋ぐ

第六回 研修成果発表会

主催 常磐津節保存会
文化庁補助事業
令和3年1月30日(土)

午後12時30分開場/午後1時30分開演

於 紀尾井小ホール

入場料2,000円

解説 安田文吉

常磐津 文字太夫 指導
常磐津 八百二 指導

浄瑠璃

常磐津 美奈衛

三味線

常磐津 文字絵

一、淀川堤狂乱
よじ がわ つづみ きょうらん

二月堂

常磐津 文字幾

上調子

常磐津 紫緒

常磐津 文字太夫 指導
常磐津 八百二 指導

浄瑠璃

常磐津 小文字太夫

三味線

岸澤 式松

一、今様夜仇討曾我
いまよう よう ちそが

夜討曾我

常磐津 初應太夫

上調子

岸澤 満佐志

常磐津 美佐季 指導
常磐津 都岳蔵 指導

浄瑠璃

常磐津 小都路

三味線

常磐津 三都貴

一、恨葛露濡衣上
うらみ くず つゆに ぬれ ぎぬ

小夜衣

常磐津 小杜珠

上調子

常磐津 美佐希

常磐津 和佐太夫 指導
常磐津 一寿郎 指導

浄瑠璃

常磐津 和洸太夫

三味線

常磐津 菊与志郎

一、初戀路千草濡事
はつこい ちちくさのぬれごと

中 お光物狂

常磐津 松希太夫

上調子

岸澤 満佐志

主旨・保存会会員の指導により講習を受けた伝承者が研修の成果を発表する

【チケットの取り扱い・お問い合わせ】

常磐津節保存会

〒157-0076 東京都世田谷区岡本1-32-8

TEL:03-3707-3763

FAX:03-3707-2908

淀川堤狂乱(よどがわつづみきょうらん) 二月堂

華厳宗の良弁僧正(六八九〜七七三)は、五歳から法相宗僧正義淵のもとで学び、早くから秀才の誉れが高かった。聖武天皇に認められ、羅索院(後の東大寺)を賜わり、大仏の造立にも加わった。「元享釈書」などにその伝記が記されていて、名僧として世に知られていました。良弁杉にまつわる伝説がもつとも人口に膾炙しています。

菅承相の家臣水無瀬左近の妻渚の方は、夫の死後、忘れ形見の二歳の光丸と桑摘みに行ったりと、光丸を大鷲にさらわれてしまいます。渚の方は狂気して、鷲の行方と光丸を探して三十年、諸国を流浪したのですが、あきらめて帰る船中で、東大寺の良弁法師は、鷲にさらわれたことがあると聞き、訪ねて行って三十年ぶりに再会します。

その物語のうち、桜の咲く淀川を、狂乱した渚の方が子供をさがしているところから始まります。そこを通りかかった鉢叩き(空也僧)と傀儡師が一休み。お互いの職業を話しているところに渚の方が入りこんで、光丸を返してと迫ります。気が狂っていると知った二人は、逃げて行くまで。

明治二十年(一八八七)二月、大阪稲荷彦六座で「三十三所花野山」の一部として「壺坂観音靈驗記」と同時に「良弁杉由来」が初演された。伝説をほとんどそのままに義太夫に脚色したもので作者未詳(団平の妻千賀とも)、二世豊澤団平作曲。明治三十年以降に出来た義太夫作品ではもつとも人気が高い。その一部を常磐津に改めたもの。

今様夜仇討曾我(いまよううちそが)夜討曾我

万延元年(一八六〇)五月五日より、江戸守田座の「忠臣曙金鶏」二番目大切所作「四季文台名残花(しきぶんだいなごり)のはなのぎ」中の「今様夜討曾我(いまよううちそが)」。別称「夜討曾我雨濡事(よううちそがあめのぬれごと)」。作詞・三世桜田治助、作曲・初世常磐津豊後大掾と四世岸澤古式部の合作。豊後大掾の語り、古式部が一世一代として勤めた。配役は、十郎・二世中村福助、五郎・三世市川市蔵、虎・初世市川新車、少将・三世澤村田之助。建久四年五月末の富士の御狩の夜、苦節十八年、曾我兄弟はいよいよ大望の時を迎える。母が整えた千鳥と蝶の狩衣を身につけ、大磯の虎と化粧坂の少将と別れ、兄弟は敵工藤を目がけて討ち入っていく。

恨葛露濡衣(うらみくすつゆにぬれぎぬ)上 小夜衣

河竹黙阿弥作詞、初世常磐津豊後大掾(四世常磐津文字大夫)初演、五世岸澤式佐作曲。

文久二年(一八六二)八月、守田座「勧善懲悪悪視機関(かんぜんちようあくのぞきのからくり)」の七幕目で初演。

素浄瑠璃では上下に分かれて演奏され、上の部分が「小夜衣、千太郎の道行」、下の部分が「久八意見」。小夜衣は叔父である悪医者村井長庵によって丁子屋という吉原の遊廓に売られてしまう。大店伊勢屋の養子千太郎は、この小夜衣に深く馴染み、切ない恋より一緒に死のうと二人は「引け四つ」という遊女の仕事を終わる深夜に手に手を取って廓を抜け出す。

二人で死所と決めた小梅の菩提所に向かう途中、持病の癩に苦しんだ千太郎は胸を押さえて立ち止まってしまった。小梅まで行かれないのであればここで死のうと覚悟を決め、詞章の「今更言うも愚痴ながら」と、二人はこれまでの馴れ初めを語りだします。そこに二人を追いかけた村井長庵の弟分で悪党の「手柄(てずか)の三次」に見つかり、見逃してほしいと頼む千太郎を三次は非常に突きつけて小夜衣を連れ戻す。

初戀路千草濡事(はつこいちぢぢぎさのぬれごと)中 お光物狂

通称「お染」。お染久松の話は大坂だったが、それを江戸風に改めたのが「於染久松色説販」(通称「お染の七役」)で、その大切浄瑠璃に桜田治助が「心中翌の噂」を書いた。それをもとにして文久年代三世瀬川如皇が改作、四世岸澤古式部が曲を整理して、「初戀路千草濡事」と、素浄瑠璃に作曲したもの。初世常磐津豊後大掾初演。

三段構成で、上が「土手場」、中が「お光物狂」、下が「道行」だったが、下はほとんど演奏されない。

ここは駒止めの石原近くの川岸。すごい夕立もやんで、空が晴れてきたところ。楊弓屋矢的屋のお竹と、船頭の長吉があらわれる。お竹はさっきの雨で店仕舞いし、長吉は山家屋の別荘まで旦那を送り届けたあと、舟を預けて両国まで行くところ。この二人もちょっと怪しい間らしい。そこに久松の許嫁のお光が通りかかる。お光は久松恋しさのあまり狂乱の態。かかわりあいになったら困るので、なにか気の鎮まるお守りはないかということから、長吉は水天宮のお守りと大山の守り太刀を出して祈り始めるが、効果はない。お光はなおも狂いながら走り去って行く。

そこへ流れて来た筏から善六が顔を出して、二人をお染久松と誤って声をかける。そこに落ちていた手紙を長吉が拾って見ると、悪人横島弥忠太から善六へ宛てたものだった。これで宝の行方がわかる手がかりと、長吉は山家屋の清兵衛のところへ善六を連れて行くまで。

紀尾井小ホール



〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号
TEL 03-5276-4500(代表)

四ツ谷駅(JR線・丸の内線・南北線)麴町口徒歩6分
麴町駅2番出口(有楽町線)徒歩8分
赤坂見附駅D出口(銀座線・丸の内線)徒歩8分
永田町駅7番出口(半蔵門線・有楽町線)徒歩8分